仮治日記

弐

へ遠13
460
2

門へ遠3
460
巻 2

縁結月下菊中の巻

柳亭種彦著

三

誘引上て逢氣
そゝのいと吹春風よ青柳の糸乃ゆめべ氣まだむ花の蕾も
目あかるる境い人のうるさくてやや青砥川の西の岸まづ木のゆる
風根松のうもあハ但馬屋清十郎連れ宗道と二人り小菊と
物ゝ両吟のらひとて奇仙るもとあり清十郎花をらるゝと
あをうよて「ヲイ三ぜやてらく川岸を寒くあるる。紹宗

伊賀市へいくとらつぶのうそろくところらうぜ「宗」なァホ
焼火がつのくちぐまりまるとまぐ暮るあくち円とあがの換さと
所くゆふ京の宝舟「春が近いとろぶのるとあくの掛でどぐう
まとといふれぐる。野良の毛接なるかとこや。こぐもまて
おろう「宗」ぐろうも文里さんい清十俳名當時のまぐ私いおまくさんの
義ろお身ろぐちらでも「らぐぎさい「るぜ「宗」るぜでいどぐうま
せん一申でも江戸鄙でもたくまでやらが後あァあませんあく
いひまとなんるる火家の且那がなでできると野鄙でるいあの咽

おやァ清かもえらうらう碁へ物殺ふ先よ業も宋通るるっても
う「宗」蓋ゆ移く人ぐ器用ふうまれるものごとおるをちまとぶ私へ
あるる咽もらう移くロとお目ぐりいく道具をどらうじつけさ
といひるぶう書画でも焼物でなが見えれべろぐるる具
ぶぐ。ぶ「つけまぐらなるさ程ロがさけるとお殺持ふろっても
男女をけろってあられまとる代印義稱ろ重まどれへまぐ
いくわうぐんるおろつぶでもそうやァ礼よりまさァる「十」
わめてくれるぶお夜食でもナレつけ「宗」ろうう「宗」さそ歩身ろといつぐ。

「イヤ良こな声絶ぎる」「ぎるぶんあぐのの地面をこて所あ
付て勤学けうく楽がなりませうう」「そりやアたゞ溝をあげる泥人
まで兼飯時で焼豆腐を」っ買てごくく汁をとりまくるむげ
まふ勤学をされてるうち不金もできるがイヤ有難を雑が押
迫でかうまぐふる」「さとぐのあれもうるさくあつて森へうと
二年だろいろてあるさぶ人もなんもまりまどまたしもいが
さて食物の好くあもてまるるようくあくろのろげで今
まぐ尾尾をぐさわくのさ「実ふなるるさの所るア継母の鑑ぐ」

「さうさあんがとぐ日ぐもられだりへあくらのそれねくなだてが
あの通りくてそして女がいがく「なのもそとく女のこう市へでぐ
そもいくぐやア・どぐらませんう」「さうでねくの皆が私母でごさう
まとと人は遊せるされ面んな面ぐと水笑がるるいとらて女房
の中ふふふくろはめらひ直されめくアあれが九の歳初のおろ
ぐ死さく母年今のおふくろが来さがまぐ二十三三でもあり
らう実のおふくろはきびーい人ぐろけが今のおふくろは己をあれこれと
かくらひぐってくれるぐらう。ふく先のかくさんれ死でくれたく

婦人のその。大きな形をして今のおくろぐろに赤こぜ。後で考へれば是ぞおやぢへ已ぐ邪魔ごろくらうぞのくらゐのごとく
イヤ我侭の者ちうぐい。それが加へて所歩くるのつらるアよ
後ろへ遠慮なくあつちもちやるる。どつちもちやるる。継母だ
又もおのれ子ばば継母ごろへ狂あるもぢ育てられさ癖今ま
やまぢと髭ひそじてあまくくられさるのを見でいろと喰く
あうふまごろ紙書と返事をしてその後ふう母の者ま
いひつけてどううるをべ合せくられるそれで五締くる知へ

ちうく男もうのいわく年うの店勘定ぱくるる兎ア延るよ
一あるく同じ人百でとうくとろが仕方がるるきこあるるの
地勘当へ海ぐへるがあるてまぐ内へくたらうれく
一そして先年入りだうり身うけをさうるされはぐぐで
今でへまんまるるぐくあとんで歩るアくぐぐ
のるいのぐ一人りへ去年までおいくぐ信州の大きく掘入をさせ
てあつて一人りへ河宗も公事といい勘定あいて特くあるたる
一われが薬物屋の番衣へさうョかくアぢそさぢや

ねんの「まるでど今もいろ衣といひまとれイヤ昔のうげも形も
るーそそそ大さうふけまーく」「そのそぎよ己あへハの婦れで
おふくろふ口っりぬっの妹ぐるのてぐらう」「ひ羽織の紋いも
勘七のところで買まーくぶるせ今ぢやあの人へお出入をいと
ません」「あれへ己が遊ぐ時ふいろ者ふ出うけてそれらよ」「なの
まりぬで」「見世の者ふ己が連てられへ一人りるいぶさうく
食物ぢて成まると大事ふるるかそらへあやぢもめ食れへ
あれ一人りは涙を負せて高賣をうまひ出入をそめくそをかそう

食るどもまそをおふくろのかからさせてやんさからるるいま
ぢやあせり異服でお無ふらぶしてみるその後もあへくろふ
配人ふかってそれがどこへ行うり行すもあさるよ己が内へ
這へ出うまるれべそれふ出入もくるのぐどころぐまぐ己が
常時へあれる所の合客イヤさんぐ我作る者ひで勘七ま
こまるぐらう」「あるこへ拝んが」「ぐうも遠くて郡合ぐるの
それくるやあ今のあるる成付ら」「表へ連てみるうこてまで
おきませう」「ゑあふまぐ二旬ぐ」「それ後の慶のち場で絵を

してある娘でトあるぞやちやうとひざを「イヤ是ハ出掛ざ年の程ハ十八
ばかり」点実ふとどい衣裳つけも見ぐ小ぶんハまろくをとこらしぬが
安物 秋四方色織うるんでも古風な物白い模様ハ絹人形これ等人形
をひとところだろぶ深さらの巣ぐらう後ろの方ぐ棒の手遠ざ
ところがあり色ろい帯ぐろうぎやうさんふ光るち奏の
京機でおとん赤氣ーの年頃ごらく式の往文でろうへ
いろれくろぐ色変おろうえんろうさんが色ろ考ふちげくへ
行く組家ちと句他りのろうぶれくのがなろへアと四人のそのろ

女の招ふぐも知るそある町人の娘ぐ。ふせ三ろ筆ふ元等あん
ろふ懐箱をかりくいそせてあるぐらう「何れハ式百まぐごと
のべ侍小姓ふあげておいことろぐふ側をおりまやりつけるぐ
あろさかり眉毛をおろされると世ろく娘入のそれふ今まで
ちらひてあのと振独がぐふるとろとふ暇をろくさのぐ
ぐぐろりまのせろ「組家いぐくぶ皆ぐろくろくろ。夫くまろくあの
きるろやうぢやア飯塚のおりらひの時ゆ法をぐろくして
他意をつろて要理びまろまそれふ さあろところぐまろく

すのやア他のところの女ふ紙の字ふけて呼ごりお猪を
いさごらのお桃ふをかちるのとあぬる紙をつふざらう〳〵その
かたりめい產で松明物ぢやアどざりません〳〵紙字八俳言の外
ふ滑稽言ばかりのるうい むづりのどざりでも原あふのとうれまへ
しぶちがみのあれこうあきるうこと前ば合て傷まば何ばうちうとも
見へねへうこち紋をひらりひらりと脱出とへ四日の後
あらまど廓中の着ふえ母こふ道中からうとえどそがるいと
いふくも知ふるのば手紙ばかりのこばうどざうえばさそのいるの

忠兵衛ののがつこ梅川ふ似くめうう一倍美しい聟をとる
のう嬢ふ母くのう先の男の新が見て〳〵うんざのるうも苦
労ふ母うば〳〵イヤモウ苦労ふるうばらおさうと今教八嘉ふれ
ねへこと向こ横顔のるんでも己ば母ふとい女ふうく似てあば
どうもおりひだうとれへこそれでもだば鼻ばかっとイヤ鱸う
鯉でも鉢ふるば女どりのさうばこへ。るんば洗米の音のう
ひを拭くきそいれる母うさ。紙家だば蟹のおりばで出りと
嬢母を見てうば紅梅二重ば〳〵あんでもいば熟代たうふ

おもちろ世人さう美中ふなられちゃ回船の者大迷惑れ
さろきうふあるるこの弟のむとびゑ沢ろうとあさんて居
まちまと。それ。扇を落しるまちろこアレあげ及で流れてあこ寒
彼方の上り場ふ「それなるこ引まこと「チャとあげこ娘
の弱等鳥ふへあらで掛ろ扇「それいそこの反根船で
娘「お落しるころこ扇ごのとるおそろるげう思ちどもは千
良と顔見合せろころ第ひ彼扇を独ふかこて内ふ
いる。清十郎ふ「片ろごといふりのふ愛敬ごるをいろりのご

ろこふなれを仕舞ふあつとのこころが店屋の揺
ふを此別荘のふまご答をもらひこれく奥様ごろう
紅葉ふ行るる今まで娘の一件でえげつえんごがい賽ご
何人がのう知つくるる「いへ彼がのうぞんじませねがるんでも
近年ね人ごかろこと又えと庭ふ何ふ入ふまご
知来れくかと思ふ程ふ人へくたごがとのて居ふこ「ヨイ三郎
一揮さて「ふをこせさせうのあご赤まごんかえれが
善信もこそこご長寿屋ふ唐様招凍のぞんかの

いろいろといふ新が百日紅の花を絶さわく世うわと伊勢造さの
ふぬぐらう四月頃人からまを世てくれこの服ふ山茶花宮要綿
や三國のぎやけらるりのぢやァ有あくらぐ色白りの葉の艶
ぐらくらう十五夜ら松虫で掃地の仕あこい拙世うぐ娘だらう
ぢやァれくを屋も伊意ふうるろくさが細家又解あるりがあるこい
あの。有楽殿燈籠をおぐるえてあるら「いへ一深澤の己が
そころの森ふあんくさふらく似てあるト又のびひ大鬼石い藪
るぐらうウちぐひ祭くまるもあれい紙屋源が小まふ

いれあげて弓散のそ元余程内かぶ貸金ぐあくさそそろく
ちの石燈籠と熊川の菜挑と偽物茶ふのを合を押
つけられくぐかくあくくるい物ふつのそのぐさよ
あくんぐらいふらけぐう「あまくさんふ和れれくのぐれあるを
知まません。時新玉朱美かるまくさるてらてふ暇と
いくくませう「もれも可用がなるまァいくるのふなのぐ
此私をびの搗のそくくあげてあまくる聖天さまくくふてら
さァ細家イヤ伊義物語見とれびうかくさ「なるくるの内

ごぜうません（とかぶろしきのつゝみをさげうちゐれて舟ゐあがり宗匠の道具市へうち別れもくそのあとを清十郎に）
一人り殘り寡の表ふまちうてこんれば「軒の草舍あり」
きさー「ちと尚ゐあるぞゐ」「ハイ。為且那様」「ま今まで
のぞた」
う曲輪行や芝浜があるから植木屋さアもうこゐの新
こん初ふるんざいろ引越さ。あるとゐもうちやでいの「まこと
ふ物年ぶりとヤスくらゐのうぞでごさりまちとさアおたゐうをされ
ま（トゆりうを振て十）「うまちうをさんゐる早未改て入いちん俵人前荷ざ」
（女房）「おうるさのごごぶうまちを十「ゐんざゐれのご」（金）「おま人掾ご深沢のこ

川ゐ見えれくてまりいとちろうろうろて親ごんゐ掾ゐ死
ゐる年ふあのーゐされまして氏家を私ふござうまして金り
目ごろだらうしあつちゐろてまて表囲ハ前の持ちのときの俵で
ござりまちとゐイヤ内のほ平俵ハすあハござうまをんまま人掾ゐ
お菓拵をあさてゐるおつりで起絵図をあうきゐるうくゐあつ
さまやうでお興ちその通ふ出来ほさ捨木も凍まちあきうのを
ぞんじて居まちとうふ三四人だうりの菓のつんでゐあい拵を拵
ごんぐおさまーさゐお気ふいれだようございまちと先頃も

おふくろ孫がおまへ孫が近いうちお帰りるるやうふあるりあ
されるから物て居覧るまろてそれでんいとあろまやるやうお
まておけるのおろまやりつけでまるこ四人でかつてありまと
「それだやアちろづきの炮烙もあるる若ごろめ去年爲ざ
彩ちアるろろさぜ「おくろるさるまでなるるふやろるとろ
どの祝されてありまと「びろろさせるつりごる八イお
菓をと。モシまろづんる孫まごびろろるさるるごごろまと。
まゃ。なるるのおふくろ孫のやうるふいあ方がみと入りごろ

まやうう「でろろいろてもおふくろの評判ど已ハたまく
わめられるとを鼓拍ふるろてもらるあんまりありごろも
わく。そこでびろろりまるとるとるふ「お祖ろけよ笑ふいあろを
拍を「まろふおふくろハ通り者ど今祖父ろくみることろ祝
つするんさげありやアいさろそくの明るハ動れの詫言ど「あれハ
あるるこの庄妹みのお菊拍ぐごごりまと「ニマヒ浩あろ仏く
みることろろさふおふくろふ仏くみるのごおふくろもまんぎで
ねくげのろ一位いまてるれがあろくろの前の亭ろハ已ダ

縁のはしゞ中

おやぢより男がるかくさらう「女そんるふお菊さまふあるこん一
ぞ十「ごろじて金とめるるあのお菊がこっだろうのそき里後して
おふくろへかくづいて来さのざ。おやぢもひけそのんごろう
山方へひきこころ世人と慶くいくこれでもおあくろもかさ
こころくいろちやうかくいこうく男方でそこそあげておやぢ
ゆも金せどころちのやろいあのもくけど拳公子出し
さのよ今度さげてかさづけでももるつのうう。をこで已おもさ
せるといつへ何方の娘ざ「これもサ今十レてへるろのかも

ぞんじませぬがふつとおもとげが口ぢうまくろふお郷代
いくてませう金澤本まち加賀屋孫三郎の娘お夏姐とまう
ものがおふくろ様の馬見ふまりまくてお掛合のうち馬代
元の借をいくてまくて私もこびく来りまくさ見もて人娘で
息子はるいくふこびの若旦助ぞのとふを武ひきあげて
敗ろふ極くこのでどざりまくとまと其幸助屋のところくお菊姐を
きくこれまくておまく様のところくお夏姐をおりふひろのころふ
極りまくさ十「ふう結納ハ淋ざのう「ところまよせんてゆサ金子の

もう御事がござりまして、ちちう様らふへ奥座敷をお
取かへ、ご用催足をあさされまして、ちぢのちうでいそのお夏様が
ご病後ごとヤスうで全快次第ぜんらいまゐりとさうぞう
らちがあきません何う又お富さまも早くあちらへおでい
ろさうたいおぞんでお夏様のことろへおみを書されまして
おふくろ様へお陽しるされてどざりませう其お使は新
まの系りまして加賀屋のお世の紹の病暇ちうふ中をのお
てご快気を出ーまもとお夏様のお部屋へおでどざう

まもとうふくふのへまもとぞ。おんごとけげあるかう
早く取かへ死ぬくられろめまもちやくおあるお様のお目
みかりこい。お目みかまさいおれぢやアあるまいあつうま
しい女ごるぞ中をてお紋を投ゆーくあうまとでこんとう酒
人らしいあつとへゆえませんあちらも身弟いかさいあうふ
うけみるとりまーくごてちら様ふつらぐると新もるいごけう
女中もこるおまもとでで塩を振まるだろうふ迎へ人
されまーくー昨日もお菊指ゲ代百の返ごゆんごうごあう

いろ〳〵行くくれと又おめをはなされまゝ〳〵ごどうもはな
かうくこもゝくされまをど持くまくさとろがもどごどるゆく
通るのをうとろくふござりまをど私もさそうふられ
ておめくふまごが通りふござりまと「ごれはんをる」と云て
見るござ「そのもごどござりまをと助てらろ事
まゝ〳〵「おとげいごふらそうる「お人のあいさたお形屋
方へまを年ごろあごりてもりまゝ〳〵お利口でおれがごごん
るふ勤めりく長崎ごござりまをう「そうらそうてあきく